

山と博物館

第54巻 第3号 2009年3月25日

市立大町山岳博物館



右側が母親の「オタリ」、左側が大きくなった息子です。

カモシカの名前募集!!

平成20年7月9日に生まれたニホンカモシカの赤ちゃんは、オタリお母さんの愛情をいっぱい受け、またときには厳しく教育されながら、今ではお母さんに追いつくくらいまで体も大きくなりました。

カモシカは外見では雌雄の判断が困難です。離乳も済んで、健康的にも問題がないと判断できたので、平成21年2月19日、少々手荒ではありますが、職員総出で捕獲をし、雌雄判別をしました。その結果、赤ちゃんは「オス」でした。両親はどちらも気の強い性格です。ましてオスだとすれば、どちらに似ても自己主張のはっきりした、たくましいカモシカに成長していくことでしょう。

性別もわかり、あとは名前です。近年では、博物館で生まれたカモシカは皆、一般公募によって名前を決めてきましたので、今回も左記のとおり、名前を募集します。

元気の良い男の子にふさわしい、すてきな名前をお願いします。多くの方からのご応募お待ちしております。

■応募期間 平成21年3月15日(日)～4月13日(月)(当日消印有効)

■応募方法 はがきにカモシカの名前と、応募される方の住所・氏名・電話番号を明記の上、山岳博物館に郵送してください。電話、FAX、メールでの応募は受け付けません。

■両親の名前 父親「ハクバ」 母親「オタリ」

山岳博物館にも応募用紙を用意していますので、ぜひ付属園において頂きカモシカの顔を見ながら、似合うと思う名前をご応募ください。
(大町山岳博物館)

牧山案内人組合草創期の人々

古幡 開太郎 (日本山岳会会員)

一、牧

安曇野市穂高牧は、平安時代の神社の格式

や地方の組織、特産物等を記録した延喜式にも登場する勅旨牧(てしまき)である信濃十六牧の一つで、猪鹿牧(いがのまき)と呼ばれる牧場であった。今では常念岳を源とした鳥川の左岸の横通岳からのびる尾根東端にある浅川山の山麓に、四〇〇戸余り、千百人程が暮らす村である。かつては孤立した何もない寒村であったが、現在では開発されいくつもの工場と二つのゴルフ場、別荘が点在する村である。一方、牧は常念岳一ノ沢登山口としてだけでなく、槍ヶ岳への近道・喜作新道を開墾した小林喜作を生んだ村であり、山岳写真家であり高山蝶の研究者であったナチュラリスト田淵行男が一六年間住んだ村としても知られながら、日本山岳史のなかではその役割を忘れ去られた村の一つである。昭和以前は、日本アルプス槍穂高への入山は徳本峠の登山口である島々宿(現松本市安曇)、江戸時代使われた飛騨街道の登山口小倉(現安曇野市三郷小倉)と牧(現安曇野市穂高牧)の三つの登山口が利用されたと思われるが、飛騨街道が利用されなくなったことにより小倉口が廃れ、信濃坂発電所建設による中房川沿いの自動車道の開通により牧から大峠經由中房温泉への登山道が利用されなくなり、日本

アルプスへの登山口としての牧の役割が半減した。さらに豊科駅から須砂渡へのバス路線の開通により、牧の登山口としての役割は忘れ去られた。

大正以前は、牧から一ノ沢を常念坊(常念小屋の前身)に登り、一ノ俣を下って槍沢を詰め槍ヶ岳に向かう道、一ノ俣の途中から中山峠を越え二ノ俣に出て西岳から東鎌尾根經由槍ヶ岳に登る道が使われた。一方、牧の古刹栗尾山満願寺から北ノ沢を詰め、宮ノ平から大峠經由信濃坂に下り中房温泉に行く道も賑わった。その頃大峠には茶屋があったとの記録がある。一九一七年(大正六)牧の山案内人七名により鳥川口山案内人が創立された。しかし、北ノ沢から中房温泉に向かう登山道は、昭和初期の電源開発により有明宮城から自動車道が信濃坂まで開通した途端使われなくなった。いずれも牧が基点の登山道であり、この頃の登山者の多くは牧で山案内人や歩荷を雇い日本アルプスに入った。槍ヶ岳肩ノ小屋(槍岳山荘)を創設した穂高三壽雄は、著書『槍ヶ岳黎明』の肩ノ小屋を建設する行で、松本から穂高經由牧に入り、牧の人夫を集めて一ノ沢を詰め、槍ヶ岳に向かった苦労話を書いている。槍岳山荘や槍沢ヒュッテで働いた人に牧の出身者が多いのもこうした経緯による。梓川筋の釜トンネル開通と中房川沿いの自動車道開通に伴い、牧は常念岳の一ノ沢登山口となり、日本アルプス

槍穂高へとしての登山口の役割を閉じた。

二、登山史における牧への関心

昭和四〇年代、常念小屋でアルバイトをしていた私は、親方の山田恒男さんに大正八年に作成された記録帖『胸中のアルプス』(写真I)を見せていただいた。和綴じ和紙に墨で書かれたその記録帖は見事なもので、彩色された登山者が登場するページもあった。何よりそこに書かれた牧の人々の名前の多さに驚くとともに、北アルプスにおける牧の役割の大きさを感じた。最近、『新日本山岳誌』の信濃の山と峠の編集に関わり繙いた日本山岳史の中に、登山黎明期の大正時代、牧に多くの山案内人や猟師がいたにも拘らずほとんど山岳史に名前を残していないことを残念に思い、一部でも記録に残したいと考えた。

二〇〇八年、牧の文化展に関わったことを幸に、まず田淵行男の牧時代に焦点をあてた展覧会を開き、次いで二〇〇九年は牧に残る山案内人の記録を集め、整理し展示する機会を得た。当初は何もよりどころがなかったが、常念小屋に残されていた『胸中のアルプス』に書かれた名前を基に、それぞれの縁者を訪問させていただくことから始めた。既に後継者がいないご家庭もあったが、お訪ねして目的をお話しし写真や資料をお貸しいただいたところ、ほとんどのご家庭で協力をお願いすることができた。期間も短く十分な調査ではなかったが、記録を展示できるところまで漕ぎ着けた。その結果、二〇〇八年十一月一五・一六日の二日間、安曇野市穂高牧公民館で「牧山案内人組合草創期の人々」と題し、明治・大正に活躍した小林喜

作前後の山案内人に関する資料の展示を行うことができた。これまで埋もれていた牧の登山史の発掘であった。

今回の調査を通して牧にはまだまだ多くの資料が残っていると思われるが、代替わりや家の改築の際ほとんどの家庭で古い資料を廃棄または焼却している現実があり、今やないと永遠に記録は残らないだろうと思われる。私としては引き続き資料収集を続け、一枚でも多くの写真や資料を記録に残しておきたいと考えている。今回資料を発掘できたのは、下記の人達である。



記録帖『胸中のアルプス』(山田恒男氏蔵)



「牧山案内人組合草創期の人々」展

三、牧の山案内人

寺島今朝一(てらしま けさいち)

寺島今朝一は、信濃山岳会会員であり、鳥川口山案内人組合の初代組合長であった。山案内を通じてドイツ大使や慶應義塾大学山岳部OB板倉勝宣などと深い親交があり、案内

人組合の事務所を兼ねた牧荒神堂の自宅には多くの登山者が訪れた。

記録によれば、一九〇六（明治三九）年に小林喜作とともに坊主の岩小屋（槍沢）から天狗池、横尾尾根經由濁沢に入り、奥穂高岳、西穂高岳を踏破している。また、一九二〇（大正九）年には、浅川博一、信濃山岳会員土橋莊三とともに小槍の初登攀を果たした。



写真1 寺島今朝一と寺島正明氏による小槍の初登攀（寺島正明氏蔵）

小林喜作（こばやし きさく）

小林喜作は、牧の名猟師・ガイドである。一九二〇（大正九年）長男一男と二人で、大天井岳切通から牛首岳、赤岩岳、西岳を経て水俣乗越を下り、東鎌尾根經由槍ヶ岳に向かう「喜作新道」を完成させた。それまでの槍ヶ岳への登山ルートは、東天井岳、中山峠から二ノ俣谷に降りて西岳に登るもので、中房温泉から槍ヶ岳まで三〜四日かかった。喜作新道は翌一九二一年（大正一〇）槍ヶ岳直下に完成した殺生小屋へ登山客を導くために開鑿したものと考えられ、小林喜作の起業家精神



写真2 小林喜作大正10年、殺生小屋にて（藤原夏雄氏蔵）



写真3 小林喜作が毛皮のカモシカ（宮島貞泰氏蔵）

が、翌年の三月五日、猟師仲間と黒部棒小屋沢でカモシカ狩猟中の野陣馬小屋で、長男一男とともに雪崩に吞まれ非業の死を遂げた。喜作享年四九歳、一男二二歳であった。

写真2は今初めて発見されたもので、小林喜作から猟師仲間松本五十聯隊にいた藤原一郎氏（夏雄氏兄）に宛てた大正一一年の年賀状である。前年開業した「殺生小屋」前で撮影した自画像をポストカードの年賀状にしたもので、当時としては画期的であった。この年賀状が届いた二カ月後他界する。

写真4の人々は、大正八年八月一七日に開かれた常念小屋落成式に小林喜作が案内した人々である。（山本茂美著『喜作新道』左端は、早大名誉教授松田治一郎氏、その右前五千尺旅館創



写真4 常念岳頂上にて（中央が小林喜作）

立者で松本養老館主井口良一氏、その右信濃鉄道（現在のJR大糸線）山口勝氏、一人おいて小林喜作、その右後時事新報記者、喜作の右前

が偲ばれる。殺生小屋は一九二二年（大正一一）六月に開業した

鶴林堂書店主小松平十郎氏、その右の着古ザの人は信濃毎日新聞牧伊三郎氏である。写真5は常念小屋記録帖「胸中のアルプス」の一部で、写真4に写っている人々の自筆署名と思われる。

藤原為一郎（ふじわら ためいちろう）

藤原為一郎は、鳥川口登山案内人組合の創始者（七名）の一人で、猟師のかたわら山案内人であった。一九二〇（大正九）年七月一日に、松本高等学校第四班四名を槍ヶ岳から乗鞍岳へ案内した記録が『胸中のアルプス』に残っている。アルプス銀座の「為右衛門の吊り岩」は、猟師であったこの人の名に由来する。山案内人藤原一郎（長兄）、重晴（二男）、修（三男）、夏雄（四男）の父である。兄弟四人はいずれも優れた山案内人であった。



写真6 藤原為一郎（修（三男）、夏雄（四男）の父である。兄弟四人はいずれも優れた山案内人であった。）

藤原修（ふじわら おさむ）

藤原修は、山案内人組合創設者の一人藤原一郎の三男として牧に生まれた。一郎、重晴二人の兄と弟夏雄とともに山の仕事に従事し、一九一九（大正八）年槍沢グリーンバンド上部に建設された大槍小屋（現在のヒュッ



写真7 大槍小屋前の藤原修（右から二人目）（藤原晟氏蔵）

寺島宗吉（てらしま そうきち）

寺島宗吉は、牧荒神堂の山案内人のまとめ役として寺島野子次郎、寺島松一、寺島力蔵、浅川得一、浅川啓一、浅川長作、増田長男などのガイドを率いた。寺島宗吉の案内人としての活動は槍穂高から剣立山方面にまで及んでいた。残された写真の中には剣の名ガイド宇治長次郎の写真があった。



写真8 寺島宗吉（小室にて）（寺島信夫蔵）

藤原夏雄（ふじわら なつお）

藤原夏雄は、常念小屋や一ノ俣小屋の歩荷仕事の後、一九三四（昭和九）年に槍沢小屋に入った。戦後は肩ノ小屋も任されるようになった。一九四九（昭和二四）年より登山ガイドに従事、常念口登山案内人組合組合長、北アルプス登山案内人組合副理事長、北アルプス南部地区夏山常駐隊隊長、自然公園指導員など、山に関連する要職を歴任した。山案内人藤原為一郎の四男である。



写真9 藤原夏雄（田淵行男と常念岳頂上にて）（沼田伯優氏蔵）

内人藤原為一郎の四男である。

増田長男(ますだ おさお)

増田長男は、弟久吾(ひさご)とともに山案内人や山仕事に従事し、一九三一(昭和六)年七月諏訪高等女学校生徒を常念岳山頂に案内するなど、多くの登山者を案内した。また、久吾は、山岳画家足立源一郎を高地から鳥帽子岳に案内して



写真10 増田長男



写真11 足利源一郎の肖像画(増田長男画)



写真12 諏訪高等女学校生徒(1931年7月)(写真11、12、13 増田佑子氏蔵)

寺島嘉多治(てらしま かたじ)

寺島嘉多治は、山岳写真家であり蝶の研究者であった田淵行男が教諭として勤務していた東京府立第二高等女学校の生徒達の山行を案内したことが縁で、一九四一年(昭和一六)頃から戦後にかけ山案内人として山行をとにした。寺島と田淵との出会いは、山案内人

寺島宗吉の紹介がきっかけであったと思われる。田淵の写真帳をそのままとして出版した『山のアルバム』にはガイドとして寺島の姿が何枚も登場し、田淵との深い親交が偲ばれる。一九四五年(昭和二〇)、田淵一家が、



写真13 寺島嘉多治

寺島野子次郎(てらしま のじろ)

山案内人と山仕事の後、調理番として常念小屋に入り昭和四〇年代初めまで勤務した。寺島が気圧の低い常念乗越で火力をうまく調整して炊いた飯は、旨くて評判であった。後に圧力釜に



写真14 寺島野子次郎

「牧の登山史」

- 1905(明治38) 日本山岳会創立
- 1906(明治39) 7月 小林喜作、寺島今朝一、坊主ノ岩小屋、天狗池、横尾尾根、酒沢、奥穂高岳、西穂高岳を踏破
- 1915(大正4) 1月15日 信濃鉄道松本駅(現北松本駅) ⇄ 豊科駅間営業開始
- 1916(大正5) 東久邇宮の上高地登山により登山道が一挙に整備される
- 1917(大正6) 日本アルプス旅館(槍沢ロッジの前身) 完成
- 1917(大正6) 牧の山案内人7名により

鳥川口登山案内人組合創立

初代組合長 寺島今朝一

創立メンバー・小林喜作、寺島松之助、藤原為一郎、増田博一、田中伊十、宮島悟一

1918(大正7) 松本中学校(現松本深志高等学校) 山岳班創立

1918(大正7) 古幡満永は、牧離山に6.6haのリンゴ園「大成園」を開墾

1919(大正8) 8月17日、常念小屋落成式開催、小林喜作、寺島宗吉ほか牧から多くの山案内人が参加した。小林喜作は、松田治一郎(早大名誉教授)、井口良一(松本養老館社長、五千尺旅館創立者)、小松平十郎(鶴林堂書店主、牧伊三郎(信濃毎日新聞)らを案内。

1920(大正9) 槍沢グリーンバンド上部に大槍小屋完成

1920(大正9) 7月5日浅川博一、寺島松一は、松本高等学校山岳部第七班を午前2時鳥川口古幡満永宅(大成園) 出発、常念小屋經由槍ヶ岳から鳥帽子岳に案内

1920(大正9) 7月9日、小林喜作は浅川茂利とともに信濃山岳会の土橋荘三、熊井博人、寺島今朝一を案内し槍ヶ岳頂上から北鎌尾根を初下降

1920(大正9) 7月13日、藤原為一郎は、松本高等学校第4班4名を槍ヶ岳より乗鞍岳へ案内

1920(大正9) 8月24日、浅川博一は、信濃山岳会土橋荘三、寺島今朝一に従い上高地から前穂高岳、奥穂高岳を縦走し、大槍小屋(大正8年建設) に到着。

1920(大正9) 8月26日 寺島今朝一が先頭となり土橋荘三、浅川博一が小槍初登攀。ロープと曲がり釘を用いた約3時間の

登攀は日本の人口登攀の芽生えであった。1920(大正9) 秋、小林喜作、一男父子により「喜作新道」開通

1921(大正10) 秋、小林喜作により槍ヶ岳殺生小屋工事完了

1921(大正11) 6月、小林喜作により殺生小屋開業

1922(大正11) 7月5日、小林喜作は山岳部学習院板倉勝宜、松方三郎、伊集院虎一を北鎌尾根に案内、早稲田隊と槍ヶ岳登頂を競った。

1923(大正12) 3月5日 小林喜作は長男一男とともに黒部棒小屋沢でカモシカ猟中に雪崩で遭難、3月17日小林喜作の遺体引き上げ作業を行った。

1926(大正15) 槍屑ノ小屋(槍岳山荘) 完成

1927(昭和2) りんご園大成園閉業、釜トンネル開通

1930(昭和5) 7月22日 増田久吾(増田長男の弟) は、山岳画家足立源一郎と松本駅で落ち合い、徳本峠を越えて上高地に入り鳥帽子岳まで案内する。

1931(昭和6) 7月16日 増田長男は、諏訪高等女学校生徒を常念岳頂上に案内(編年・古幡開太郎)

山と博物館 第54巻 第3号

発行 千 398-0002 長野県大町市大町八〇五六-一 市立大町山岳博物館

TEL 026-133-0111 FAX 026-133-0111 E-mail:snpaku@city.yamanouchi.nagano.jp URL:http://www.city.yamanouchi.nagano.jp/snpaku

印刷 有限会社 北辰 印刷 定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可) 郵便振替口座番号 〇〇五四〇-七-一三三九九三

